母子相互作用の臨床的・心理・行動科学的ならびに社会小児科学的意義に関する研究班

総 括 研 究 報 告

班長　小　林　　登（東京大学医学部小児科）

わが国の先進化，工業化さらに生活圏の都市化に伴って，生活一般は豊かになったが，小児の生活環境は急速に変化し，その結果として小児科学，育児学，保育学，さらに教育学の実践的な分野で多くの問題がみられている。たとえば親子関係の失調，虐待児問題，心身障害児の療育，育児障害，さらに委託育児，登校拒否，暴力などはその代表であろう。これらの問題を解決するためには小児科学や，医学のみでは充分でなく，保育学，教育学，心理行動科学などと連絡して，問題を包括的にとりあげなければならない。

本研究班は昭和55年に母子相互作用 mother infant interaction ならびに親子関係を中心として妊娠，分娩，出生の時点より乳児幼児の育児，保育のあり方を産科学的，小児科学的，発達心理学的，行動科学的，さらに教育学的に研究し，あわせて，その社会的意義を調査分析することを目的として発足した。

班員は全国の関係分野の専門家から選び，小児科学者21名，産科学者4名，心理・教育・保育学者7名，その他4名，計36名をもって編成した。さらにこの問題に関係のある学識経験者5名を評価委員に依頼した。

とりあげられた研究プロジェクトの主なものは次のように整理することが出来る。

1. 母子相互作用の行動科学的および情報化学的分析
2. 胎児・新生児・乳児の行動発達
3. 乳児の愛着（attachment）形成のメカニズムの分析
4. 母性確立のメカニズムの分析
5. 母親の育児行動ならびに育児意識の分析
6. 母親の育児における意義
7. 心身障害児の親子関供の分析
8. 分娩形式ならびに新生児の養育方式と母性意識の関係
9. 母性剝奪症候群の内分泌学
10. サルなどの動物による育児の実験的研究
11. 日本各地における育児の実態調査

本研究班は，小児科学，産科学，耳鼻咽喉科学，精神科学などの臨床医と，心理学，教育学，保育学，心理行動科学など広い分野の学者とが協同して研究にあたる班構成となっており，各研究班の研究遂行の上のみでなく，班会議では，これらの各専門家が「母子相互作用の意義」をめぐって討論を行い，学際的な研究を行い大きな成果をあげた。

また，ウエスタンリザーブ大学のクラウス教授，ハーバード大学のブラゼルトン教授など，この分野の研究では世界的な権威である学者を班会議に迎え，研究につき討論するとともに，本研究班の成果を世界的に広めた。

本研究班の3年間の研究成果は，各班員の研究報告書および総括的なまとめとして以下に報告されている。

各研究プロジェクトとも，3年間の研究期間に研究方法を確立し，問題点を指摘し，その解決法につ

いても検討を加えた。

基礎的な面では，母子分離の影響がどのように現れるかを，サルおよびイヌで研究し，この影響を消失または軽減させるための方策についても検討が加えられた。

人間に於ても，母性性形成のメカニズムが研究され，子から親，親から子への相互作用がいかに重要であるかが明らかにされた。このような愛着形成には，胎児や新生児が極めてすぐれた能力を有し，早期から母子間で影響を及ぼし合っていることを科学的に証明し得たことも本研究班の成果であった。

母子相互作用が十分に機能しない場合としての，未熟児，被虐待児，自閉症児，心身障害児などの親子関係についても研究がすすめられ，問題の解決法が明らかにされた。

社会的な面でも，委託育児や乳児院の問題についても研究成果が得られた。

以上の研究より，母子相互作用は人間形成の上で極めて重要であり，生得的（遺伝的）な因子と，環境的（文化的）な因子が適切に関与してはじめて小児の健全な発育が得られ，これがさらに次代の母（親）子関係にも関与することが明らかにされ，学術的な面のみでなく社会的な面からも母子相互作用を重視すべきであることが明らかになった。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

わが国の先進化,工業化さらに生活圏の都市化に伴って,生活一般は豊かになったが,小児の生活環境は急速に変化し,その結果として小児科学,育児学,保育学,さらに教育学の実践的な分野で多くの問題がみられている。たとえば親子関係の失調,虐待児問題,心身障害児の療育,育児障害,さらに委託育児,登校拒否,暴力などはその代表であろう。これらの問題を解決するためには小児科学や,医学のみでは充分でなく,保育学,教育学,心理行動科学などと連絡して,問題を包括的にとりあげなければならない。

本研究班は昭和55年に母子相互作用 mother infant interaction ならびに親子関係を中心として妊娠,分娩,出生の時点より乳児幼児の育児,保育のあり方を産科学的,小児科学的,発達心理的,行動科学的,さらに教育学的に研究し,あわせて,その社会的意義を調査分析することを目的として発足した。

班員は全国の関係分野の専門家から選び,小児科学者21名,産科学者4名,心理・教育・保育学者7名,その他4名,計36名をもって編成した。さらにこの問題に関係のある学識経験者5名を評価委員に依頼した。

とりあげられた研究プロジェクトの主なものは次のように整理することが出来る。

1.母子相互作用の行動科学的および情報化学的分析
2.胎児・新生児・乳児の行動発達
3.乳児の愛着(attachment)形成のメカニズムの分析
4.母性確立のメカニズムの分析
5.母親の育児行動ならびに育児意識の分析
6.母親の育児における意義
7.心身障害児の親子関供の分析
8.分娩形式ならびに新生児の養育方式と母性意識の関係
9.母性剥奪症候群の内分泌学
10.サルなどの動物による育児の実験的研究
11.日本各地における育児の実態調査